

左京五条三坊の調査

—第178-3次

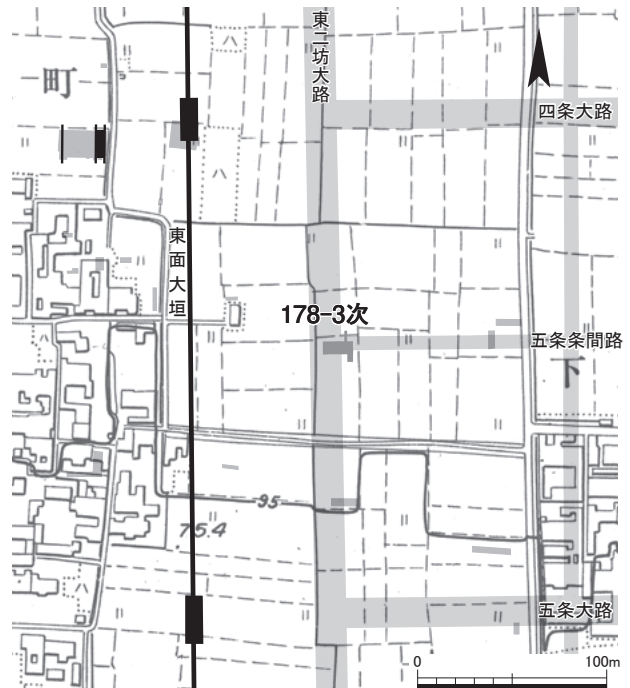
1 はじめに

今回の調査は、個人住宅建設にともなう事前調査として実施した。調査地は橿原市木之本町で、藤原京左京五条三坊にあたり、従前の調査成果によれば、東二坊大路および五条条間路の交差点の存在が予想される位置である（図Ⅱ-24）。調査区はこれらの条坊道路の側溝の検出を主たる目的とし、東西16.0m、南北7.0mの規模の本調査区を設定した。その後、五条条間路両側溝を検出するために、新たに調査区の南側に東西3.0m、南北4.0mの南拡張区を、北側に東西1.5m、南北5.5mの北拡張区を設けた。調査面積は本調査区と南北拡張区をあわせて約132.3㎡である。全体の発掘調査期間は2013年7月1日から7月19日である。

2 検出遺構

基本層序 調査区の基本層序は、地表面から順に黄褐色砂質土（現代の造成土）、黒褐色砂質土（現代の畑耕作土）、明褐色粘質土または褐灰色粘質土（床土）、暗灰黄色粘質土または褐色粘質土があり、さらにその下層にはオリブ褐色粘性砂質土または灰黄褐色粘性砂質土が調査区全体にわたって堆積する。現地表面は、現代の造成土が厚く盛られた調査区南側で標高75.0m前後、現代の盛土がない調査区北側の畑耕作土上面で標高74.3m前後である。今回検出した遺構のうち、古代以前に属すると考えられる遺構は、標高73.8m前後の暗灰黄色粘質土または褐色粘質土上面、およびその下層のオリブ褐色粘性砂質土または灰黄褐色粘性砂質土上面で検出している。このうち、後述する藤原宮期前後の遺物が出土した溝等は、いずれも暗灰黄色粘質土または褐色粘質土上面から掘り込まれていることから、この土層は藤原京造営段階ないし藤原京期の整地土の可能性が考えられる。

検出遺構の概要 古代以前に属すると考えられるものは南北溝1条、東西溝4条、斜行溝1条、土坑7基である（図Ⅱ-25・26・27）。このほか、耕作にともなう小溝が南北方向に10条、東西方向に1条認められる。以下、各遺構の内容を説明する。

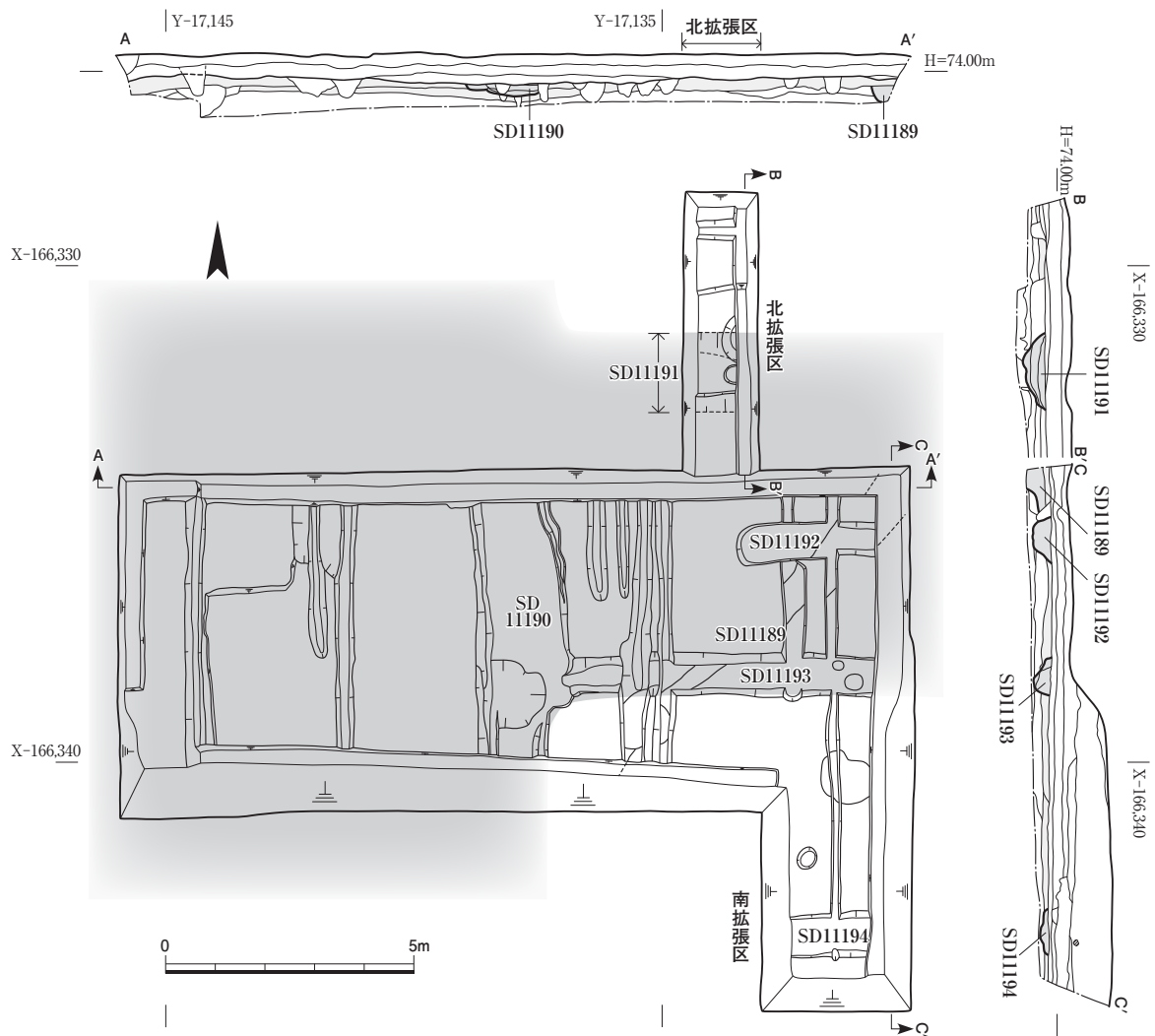


図Ⅱ-24 第178-3次調査区位置図 1:4000



図Ⅱ-25 本調査区全景（北拡張区設定前。北東から）

南北溝SD11190 本調査区中央で検出した南北方向の素掘溝。溝の幅は1.4~1.8m、深さは最大で0.3m程度が残る。長さ5.1m分を検出し、さらに調査区外の南北へ延びる。また、本調査区中央やや南よりで東西溝



図Ⅱ-26 第178-3次調査遺構図・土層図 1 : 150

SD11193が接続する。溝の埋土中からは藤原宮期前後の須恵器、軒丸瓦、軒平瓦などが少量出土している。

東西溝SD11192 本調査区東北隅で検出した東西方向の素掘溝。溝の幅は0.7~0.8m、深さは最大で0.4m程度が残る。東は調査区外へ延びるが本調査区東辺から2.8m西で途切れる。溝埋土から須恵器、土師器が出土している。

東西溝SD11193 本調査区東側で検出した東西方向の素掘溝。溝の幅は0.7~0.9m、深さは最大で0.4m程度が残る。東は調査区外へ延びるが本調査区東辺から西へ約6mの本調査区中央やや南よりで南北溝SD11190に「T」字形に接続し、そこから西へは延びない。溝埋土からは

7世紀~藤原宮期前後の須恵器、土師器が出土している。

東西溝SD11194 南拡張区で検出した東西方向の素掘溝。溝の幅は0.8~1.0m、深さは最大で0.2mほどが残る。長さ1.6m分を検出し、さらに調査区外の東西へ延びる。溝埋土からは須恵器が出土している。

東西溝SD11191 北拡張区で検出した東西方向の素掘溝。溝の幅は1.6m、深さは最大で0.5m程度が残る。長さ1.0m分を検出し、調査区外の東西へ延びる。溝埋土からは須恵器や土師器が出土している。

斜行溝SD11189 本調査区東側で検出した素掘溝。北で東に約45°振れて斜行する。溝の幅は、0.3~0.9m、深さは0.4m以上が残る。長さは8.0m以上を検出し、さら



図Ⅱ-27 本調査区南半および南拡張区の状況（北東から）

に本調査区外の北東－南西へ延びる。溝は調査区全体に堆積する灰黄褐色粘性砂質土またはオリーブ褐色砂質土から掘り込まれており、藤原京造営段階ないし藤原京期の整地土と考えられる暗灰黄色粘質土および褐色粘質土によって覆われていたため、東西溝SD11192・11193や耕作にともなう小溝の埋土を完全に除去した溝底面で検出した。したがって、これらより明らかに古い時期の遺構である。調査区内からは、古墳時代の土器や埴輪も出土していることから、古墳時代に属する遺構である可能性を考えておきたい。

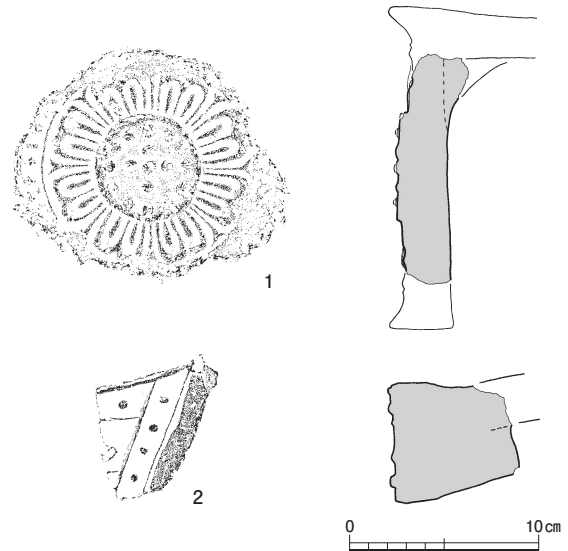
土坑群 本調査区東側および南北拡張区を中心に7基の土坑を検出した。このうち一部の土坑は遺構の重複関係から東西溝SD11193より古いと判断されるものあり、溝掘削以前の遺構が含まれている。ただし、各土坑の性格は不明である。（清野孝之・山野ケン陽次郎／熊本大学）

3 出土遺物

調査区から、土器、埴輪、瓦類、木製品、獣骨、獣歯等が出土した。

土器 遺物整理用木箱3箱分の土器類が出土した。床土出土の近代の陶器を除くと、古墳時代から中世までの土師器、須恵器、瓦器、埴輪などがある。多くが小片であり、図化可能なものはほとんどない。

南北溝SD11190、東西溝SD11193・11191から出土し



図Ⅱ-28 第178-3次調査出土瓦類 1：4

た土器には、杯A、杯C、杯H、甕、ミニチュア土器などの土師器や、杯A、杯B蓋、杯G、杯H、高杯、器台、壺、甕などの須恵器がある。これらの土器には、飛鳥Ⅲ以前と考えられるものや、藤原宮期以降のものもみられるが、かえりのない須恵器杯B蓋など、藤原宮期前後に属すると思われる資料を確実に含む。同様のことは、藤原京造営段階ないし藤原京期の整地土と考えられる土層の上面から出土した土器にも指摘できる。（大澤正吾）

瓦類 今回の調査により出土した瓦は、軒丸瓦1点、軒平瓦2点、へら描き平瓦1点、丸瓦8点（0.820kg）、平瓦19点（2.50kg）と少ない。床土から出土した少量の近世瓦を除くと、ほとんどが7世紀後半～藤原宮期ごろの瓦と考えられる。軒丸瓦では、粗く砂粒の多い胎土（N/Pグループ）でつくられた6275Aが南北溝SD11190から出土した（図Ⅱ-28-1）。

軒平瓦2点のうち、1点は重弧文で藤原京造営段階ないし藤原京期の整地土と考えられる土層の上面から出土した。顎部分のみであるため、正確な弧線の数は不明だが、四重弧もしくは五重弧とおもわれる。弧線は凹凸が低く断面が三角形状を呈する。もう1点は偏向唐草文軒平瓦で南北溝SD11190から出土した（図Ⅱ-28-2）。貼り付け段顎をもち、顎の長さは6.5cm、深さは2.3cm。凹面の瓦当際を横方向に削る。硬質で灰色、胎土には石英・長石粒が多く含まれる。脇区の界線が瓦当上端から下端ま

で延びる点で既存の型式に該当するものがないため、新形式の可能性はあるが、焼成・技術・文様からみて時期は藤原京期前後とみられる。(森先一貴)

その他 東西溝SD11193からウマの臼歯、南北溝SD11190から燃えさし、木片が出土した。

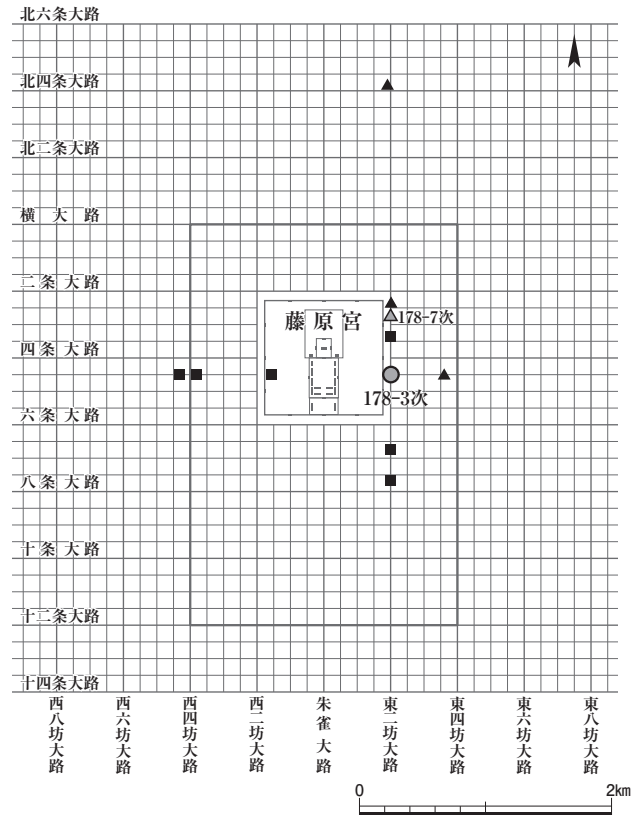
4 まとめ

今回の調査で検出した南北溝SD11190、東西溝SD11191・11193は、これまでの藤原京における調査成果と比較すると、藤原京の条坊道路の側溝である可能性を指摘できる。南北溝SD11190は東二坊大路の東側溝に、東西溝SD11191・11193はそれぞれ五条条間路の北および南側溝にあたと想定される(図II-29)。

東二坊大路については、これまでに左京四条三坊・七条二坊、紀寺跡の東側で東西両側溝が検出されている^{1・2)}。南北溝SD11190はこのうちの東側溝の北側延長線上に位置しており、埋土中に藤原宮期の土器や瓦類を含むことや、五条条間路南側溝に比定される東西溝SD11193と「T」字形に接続する点などから、東二坊大路東側溝の可能性が高いと考えられる。

五条条間路については、先行条坊(西方官衛下層)を含めこれまでに、右京五条四坊、右京五条五坊で南北両側溝を確認しているが、左京では同一地点で両側溝を確認した事例がない^{3~5)}。このうち右京五条四坊で検出した五条条間路南側溝がやや南に位置するものの、その他の南北側溝の東側延長線上にSD11191とSD11193がほぼ重なってくる。このため東西溝SD11191が五条条間路北側溝、東西溝SD11193が五条条間路南側溝に該当する可能性は十分に考えられる。その場合、五条条間路の路面幅は4.8m、溝心々幅は6.1mとなる。

ところが、これまでの調査で検出されている五条条間路の幅は、右京五条四坊で路面幅が9.6m、溝心々幅が10.5m、右京五条五坊で路面幅が5.4m、溝心々幅が6.6mである⁶⁾。ややばらつきはあるものの、いずれも今回検出した東西溝SD11191を五条条間路北側溝、東西溝SD11193を五条条間路南側溝とした場合の五条条間路より幅が広い。今回の調査区では五条条間路北側溝の可能性を指摘した東西溝SD11191の検出長が短い点、加えてこれまでに左京で五条条間路の両側溝を確認した事例がないことを考慮すれば、今後の左京での調査成果をあわ



図II-29 今回の調査と関連する条坊遺構検出位置

■：両側溝を検出、▲：いずれかの側溝を検出

せ、慎重に検討を重ねていく必要がある。

このように、今回の調査で検出した東西溝SD11191・11193を正確に評価していくためには、今後の資料の蓄積、研究の進展を待つ必要がある。しかしながら、五条条間路南北側溝の可能性を指摘できる遺構を、左京において同一地点で検出したことの意義は大きい。東二坊大路東側溝と推定できる南北溝SD11190の検出も含め、今後の藤原京の条坊研究を進展させる上で貴重なデータを加えることができたものといえよう。(清野・山野)

註

- 1) 檀原考古学研究所編「紀寺跡第7次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1992。
- 2) 「東二坊大路・宮東面・東方官衛地区の調査(第75-13次)」『藤原概報25』。
- 3) 奈文研『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II—藤原宮西方官衛地域の調査—』奈文研季報第31冊、1978。
- 4) 檀原市千塚資料館編『平成4年度埋蔵文化財発掘調査速報展 かしはらの歴史をさぐる』1993。
- 5) 檀原市千塚資料館編『平成8年度埋蔵文化財発掘調査速報展 かしはらの歴史をさぐる 5』1997。
- 6) 奈文研『藤原京研究資料』1998。